

今回の旅行は、従来に増して目的の多い旅である。これまでの3回の連載で、①友人の娘さんの出産に際し、頼まれた粉ミルク・哺乳瓶などを渡したこと。②長年の懸案であった「千山」への登頂と「千山弥勒大仏」。③世界一長いという水路を持つ鍾乳洞見学——について紹介したが、4回目となる今回(5月13日)は二つの目的があった。一つは、大連での2年間そしてその後の大連訪問でも話題にも上らず、知らなかった「営城子漢墓」を見学すること。(これは一昨年友人のMさんから資料を頂いて初めて知った) もう一つは、老虎会のKさんからの依頼である。老虎会とは、大連で生まれ終戦時現地の日本の小学校・中学校に通っていた人達の集まりである。私も大連に縁があると言うので入会を認めていただいた。老虎とは、言うまでもなく年老いた虎ではなく(会員は全員70歳以上の老人であるが)大連市の海辺に老虎灘という観光名所があり、それを会の名称としたのである。

依頼の内容は、戦前大連市内に③を除き日本人が設計・建築したと思われる有名な建物の現状について、今年大連に行かれるなら何とか調べてもらえないかということである。依頼の建物は次の4つでこれらの資料も頂いた。

#### ①星が浦ヤマトホテル

ヤマトホテルは満鉄が経営したホテルチェーンの名で、中山広場に現存する大連ヤマトホテル(現在大連賓館・設計者は太田毅)が有名である。東北地方にいくつか(長春・瀋陽・旅順・ハルピンなど)建設された。このホテルの場所は市内の星海公園(昔はこの辺りを星が浦と呼んだ)付近。設計者は不明。

#### ②満鉄総裁邸

市内沙河口区黒石礁付近。資料では第14代総裁を務めた、あ

の松岡洋右邸とある。設計者は不明。なお初代総裁の後藤新平邸はロシア風情街の奥にある旧大連市役所(この建物は1907年から1年間満鉄本社・満鉄設立は1906年11月)のそばの満鉄総裁公邸。

#### ③双葉学院

アメリカ人建築家・ヴォーリズの設計。1939年竣工。市内中山区青泥街付近。

#### ④浪速寿司

大連を代表する建築家・横井謙介の設計による洒落た3階建ての建物。1935年竣工。1階が浪速寿司である。市内中山区友好広場付近。

私は歴史好きなので、Kさんの依頼を二つ返事で請け負った。資料の写真はどれも素晴らしい。状況は後述したい。

さてまず「営城子漢墓」から紹介したい。「営城子」とは(その1)に書いたように大連市内から北西の渤海湾沿いにある町の名前である。友人のMさんが漢墓があることを知ったのは、1992年に語学短期留学した大連にある「大連外国語学院」のテキストである「中級漢語課本」からであった。その第1課が「営城子漢墓」である。Mさんは興味を引かれたようであるが、当時の旅順地区は外国人に開放されておらず営城子に行くことが出来なかったという。(営城子の所在地はわんりい225号の4頁に記載)

その後解放され、多くの資料を集めて漢墓についての小冊子を作られ、私も一部頂いたというわけである。ともあれ大連は19世紀末にロシアが街づくりを始める前は農漁村で、今でこそ大連市は大きい顔をしているが歴史に書かれてからまだほんの120年余りであるのに対し、営城子周辺は2千年前後の記憶すべき歴史があったと言えるのではないかと。いずれにしても同学院



「営城子漢墓」の管理人と筆者



大連漢墓博物館 (百度百科から)

がこの地方の歴史を大事にしていると言えよう(この漢墓に関する民話も記載されている)。留学生用の教科書にまで載っているのであるから。念のため大連にいる中国人の友人の何人かに聞いたが、知っているとの返事は残念ながら一人もなかった。大連は、街が綺麗で住みよいし、どんどん発展していると皆は言うけれど、このような歴史や民話を知ってこそではないだろうか。ちなみに老虎会の集まりで漢墓を知っているか聞くと、半数近くの方がご存知で現地に行ったことがある方もいた。

宮城子漢墓の場所は事前に調べてほしいと伝えてあったので、9時半頃に彼らのマンションの近くで合流し、友人の娘婿の車で4人で出発した。まず「大連漢墓博物館」に行くと言う。それは漢墓遺跡に隣接する場所にあった。白い長方形の建物だ。中はいろいろな展示物や出土した土器や銅製品がたくさんあった。友人たちはさっと見て、車で待っているという。昨年大連郊外の金州からすぐのところにある歴史遺産の烽火台(わりりい219号参照)を探すときもそうであったが、地元の多くの人達は自分たちの住む街の歴史に関心を示さず外国人の我々が関心を持つとはどういうことか!と言いたいが得てしてこんなものであろう。私は車に乗り込みすぐ近くの漢墓の正門前に車を停めてもらった。2人は車で待っていると言うので、私と友人とで買祿のある木製の門の脇のくぐり戸から中に入った。

さてここで漢墓の説明をしよう。この漢代の墓は、旧満州国時代の1931年に日本の「東亜考古学会」によって発掘された、今から約2千年後の後漢時代

(AD25年~220年)の遺跡である。つまり日本人が発見したのである。そして生き生きとした壁画で有名となった。今でこそ中国国内では後漢時代の壁画墓がいくつも発掘されているらしいが、この宮城子の壁画墓は中国で初めて調査された漢代の壁画墓であるため、中国考古学の歴史研究における重要な遺跡らしい。宮城子漢墓は、写真のような民家の庭に建てられた平屋の建物の地下にある。地下には、主室、前室、後室などがあり、これらの墓室はレンガで積み上げられ主室の天井は二重構造になっているという。そして主室の奥壁には墓主の昇仙図と一人の従者を従えている壁画があるらしい。「らしい」と書かざるを得ないのは、中に入れてもらえなかったからである。この墓は当時の洛陽あたりで流行した墓の構造であるらしくそれが遠く遼東半島のこの地にどのようにして伝わったのであろうか。どのような文化交流があったのであろうか、それとも皇帝の遠征による戦でもあったのか、興味深い。

大連の中心部から北に少し行ったところに、ひと昔前はこの地方の行政・軍事の中心であった「金州」という町があるが周辺で漢代の城が発見されている。研究によれば、宮城子漢墓は金州にあった城の住民の墓地のようである。つまり金州から少し離れた田舎に住民たちの墓を造ったのであろうか。とすれば主室の墓主は、この城の主であったのではなかろうか。ちなみに宮城子漢墓から200メートル離れたところに1999年に発掘された「沙崗子農家院漢墓」があるが更なる研究成果を待ちたいものである。

話を戻すと、くぐり戸から中に入ったところ、そこに墓地の管理人がいて友人から「この人は遠く日本から来たが、壁画を是非見せてやってほしい」と頼んでもらったが、残念ながら断られてしまった。仕方ないので私は管理人にあれこれ話をしたところ、打ち解けてきてこの墓の説明をしてくれた。60歳と言ってたが日本人が発掘したこともよく知っていた。いくつか写真を撮った後、握手をして別れた。

4人で市内に戻り、引き続き老虎会のKさんに頼まれた建物を探しに出ることにした。紙面の関係で以下は次号に譲りたい。

(続く)